

国際平和のための世界経済人会議ミニ・フォーラム

Session6：広島を世界に広げ SDGs を達成する【未定稿】

《登壇者（敬称略）》

・モデレーター

平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロデューサー）

・パネリスト

末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

根本 かおる（国連広報センター 所長）

湯野川 孝彦（株式会社すららネット 代表取締役社長）

和田 徳之（next ひろしま実行委員会代表／株式会社和大地 代表取締役）

○司会者

大変お待たせいたしました。ただいまよりセッション6「広島を世界に広げ SDGs を達成する」を開始いたします。モデレーターをお務めいただきますのは、金沢工業大学経営情報学科講師で、BoP Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロデューサーでもございます平本督太郎様です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロデューサー）

それでは、このセッション、広島を世界に広げ SDGs を達成するというようなことで始めさせていただきたいと思います。まず、皆さまの自己紹介の前に、私から、このセッションの特徴について、少し共有させていただきたいと思います。これまで5つのセッションが設けられていたかと思いますが、それぞれのセッションに関して、タイトルにあるように平和かける、ある特有の領域に関してかけ算をしたテーマに沿ってお話をさせていただく、ある意味、専門領域に関するトークというものがお話しされていたというようなことになるかと思っています。

このセッション6に関しては、ある意味、複合的な、さまざまな分野の方々にご登壇いただいておりますけれども、テーマとしては、これから広島として、日本の価値を世界に広げていくためにはどうしていったらいいのかというようなことをテーマにしていきたいと思っております。つまり、専門領域のなかでの議論だけではなくて、実際の活動ベースのなかで、この平和に関して真摯（しんし）に向き合ってきた広島、日本が何を世界に共有

できるのか、こういったところについて少し話しながらヒントを得ていきたいと思っています。
るところでございます。

ですので、今回、パネリストに来ていただいた皆さまも、なにか、テーマに関して議論をするというだけではなくて、具体的なアクションを起こしていただいている方々に登壇いただいているというところの方が大きな特徴になってございます。では、最初に、簡単に自己紹介ということで、まず、湯野川（湯野川孝彦）様から、簡単に自己紹介をお願いできますでしょうか。

○湯野川 孝彦（株式会社すららネット 代表取締役社長）

すららネット（株式会社すららネット）の湯野川と申します。こんにちは。私どもは、これはまた、あとで映すので、今は結構ですが、eラーニングで子どもたちが学ぶというものをですね、小学生から高校生ままでを対象に、国内ですと、約4万、もうすぐ5万人ぐらいの子どもたちが日々学んで、ということをやっています。

ちなみに、この分野ではアダプティブなeラーニングということで、学力が低い子には問題が簡単になったりとか、優秀な子には難しくなったりとか、いろいろな機能が付くようになっていまして、かなり、いろいろな分野に入るようになりまして、今でいうと、学校はもちろんですが、例えば、発達障害、学習障害の子どもたちが通うような放課後等デイサービスの施設にも入り始めましたし、従来であれば、あまり教育ができなかった学童保育ですね。そういった分野にも入っていったらという形、国内で活動をしております。

ちなみに広島との縁でいいますと、話題の広陵高校さんは、日々、すららで生徒さんたちに学んでもらって、一部の県立高校でも使ってもらってたりします。あと、広島つながりでいいますと、私の父親は原爆にちょうど出くわしていますので、被爆者手帳を持っています。私は被爆2世という、そういうご縁もございます。あと、海外でも、今日はそちらの話がメインなので、後ほど申しあげますが、JICA（国際協力機構）さんのプロジェクトをきっかけとしてスリランカで貧困層向けにデジタル寺子屋と申しますか、子どもたちが算数を学ぶというような塾を展開したり、インドネシア、インドでも活動を展開していますので、これは後ほどいろいろご紹介をさせていただきます。以上です。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

ありがとうございます。それでは次に関（関治之）様、よろしくお願いたします。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

はい。皆さん、こんにちは。コード・フォー・ジャパン（一般社団法人コード・フォー・ジャパン）の関と申します。よろしく申し上げます。コード・フォー・ジャパンというのは、皆さん、聞き慣れないかもしれないですけども、一般社団法人として、テクノロジーを地域のコミュニティーとうまく活用することで、行政とかいろいろなステークホルダーと共存環境をつくって、新しい、より住みやすい街をつくっていくということで、街づくりで IT を生かして共存していきましょうというような、そういうコミュニティー運営をしています。

そもそも、私自身の出自が IT エンジニアとして、特に、オープンソースソフトウェア、みんながフリーに使えるソフトウェアですね。そのコミュニティーでいろいろ活動していて、いわゆるコミュニティー活動をソフトウェア関係の方に生かそうと。東日本大震災があったときに、それまで、普通に仕事でいろいろと活動していて、ああいう震災があったときに、何が自分で出来るんだろうと考えまして、それで、実際にオープンソースのソフトウェアを使って、クラウドソーシングで地域の情報を集めてマッピングをしていく、地図上に、今、何が起きているというのをマッピングして整理をしていくというプロジェクトをやったのがきっかけで、こういう社会活動みたいなのに参加するようになったと。

それで、いろいろ、例えば被災地に行ってワークショップをやったりするなかで、地域のコミュニティーの大切さみたいなものを改めて感じまして、ただ、そのコミュニティーというのが、IT をうまく使うことで、より新しい形の、昼間忙しいとか、そういった人たちも参加できるような、よりレイヤー高いようなコミュニティーができるんじゃないかと思って、それでコード・フォー・ジャパンというのを立ちあげました。

そのなかで、一方、行政の IT 活用も、なかなか、エンジニアから見て、こういうことを言っていないか、あれですけども、いわゆる、いけていないというところを感じまして、もっと、行政も IT を活用することによって、いろんなことができるよと。さらに市民参画みたいな、もっと新しい形でできるよということで、行政側のコンサルティングみたいなことも最近は行っているという状況です。今回の話に関しては、後で、またご紹介したいなと思います。はい、以上です。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブ・リサーチ）

ありがとうございます。では、続きまして末松（末松弥奈子）さん、よろしく申し上げます。

○末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

はい。ツネイシホールディングス（ツネイシホールディングス株式会社）の末松です。よろしくお願いたします。ツネイシホールディングスという会社は、多分、ご存じない方が多いと思うんですけども、みろくの里、うなずいていただきました、ありがとう。みろくの里とか、例えば、50年ぶりに去年から水上飛行機が瀬戸内海で飛んでいるんですけども、せとうち SEAPLANES とか、そういったような事業をやっている会社でございます。

1903年に会社が設立されまして、海運業からスタート、常石造船という、主に中核事業は造船になるんですけども、造船は、今年、設立から100周年という節目の年になっております。この会社は、いわゆるプライベートセクターで、ファミリービジネスです。上場していません。なので、私は4世代目、4代目のジェネレーションになるのです。実は、女性のボードメンバーは私が初めてです。それまで、ずっと男性社会のなかで、1人だけ女性が役員会に入っているというような状況です。

私が、こちらのファミリービジネスに入って5年目になりまして、少しずつ常石造船であるとか、常石グループというものを皆さんに知っていただけるようになってきているのは、私が担当しているところが、CSVというところ、私が3年前につくりまして、情報発信も含めてですけども、これまでの会社の活動を皆さんに理解していただくということで、いろんなことに、この会もそうですけど、参加させていただくようになっていきます。

多分、多くの日本の会社は情報発信が下手で、いろんなことに取り組んでいらっしゃるんですけども、それが点としてしか知られていなくて、それを企業文化であるとか、企業の歴史のなかで振り返るといふか、線にしていく、ストーリーにしていくというところが、すごく下手なんじゃないかなというふうに思っています。例えば、常石グループの場合、水上飛行機であったりとか、遊園地であったりというのは、実は造船不況のために、雇用を守るために新しい事業に進出したのです。

経営理念が、従業員の幸せのために事業の安定と発展を追求する、従業員の幸せのためにということになりますと、雇用を安定して守っていかなければいけない。そうすると、やはり、50年、100年事業を続けていくと、この事業が本当に、10年後、20年後日本で展開できるかなという、そういう危機感を経営者としては持つと思います。そういったなかで多角化を進めてきました。断片だけを見ると、無謀な多角経営をしているように見えますけれども、そういった経営理念も含めて、このあといろいろお話ができればと思っています。よろしくお願いたします。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

BoP Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

はい、ありがとうございます。では、もう何度も登壇いただいているので、根本（根本かおる）様、よろしくお願いいたします。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

本日3回目の登壇になります。国連広報センターの根本です。でも、まだ国連広報センターがどんな役割を担っている事務所なのかというところはお話ししていないので、それをご紹介したいんですけども、皆さんが国連と聞いて思い浮かべられるのはニューヨークのイーストリバー沿いの国連事務局本部だと思うんですけども、その国連事務局本部にとっての日本における出先機関が私たちの国連広報センターで、平たくいうと、国連にとっての日本における大使館のような、そんな役割をしています。

私たちの担っている役割、第一に国連のグローバルなメッセージを日本のローカルな文脈を考えたうえで発信する、グローバルメッセージのローカライゼーションです。日本語は、国連公用語の1つではありませんので、残念ながら公式文書、あるいはニュースリリースなどは自動的に訳されて発信されるわけではありませんので、私たち、国連広報センターが目利きになって、この情報こそ日本人たちに知ってもらいたい、あるいは、知らないといけないというようなものを選んで日本語化してお伝えする、そういった仕事をしています。

日本には、広島も含めて、全部で28の国連の事務所がさまざまな場所にあります。広報面でこの28の事務所を調整して、同じ方向を向いて1つのメッセージを発信していくという、そういう旗振り役もしてまして、共通課題の、最も代表的なものが、あらゆる国連の事務所に関係する**SDGs**です。持続可能な開発目標。あるいは、あるいは新しい事務総長のビジョンであるとか、そして、国連と日本との関係とか、そういったことに関しましては、私たちが旗振り役になっています。

同時に、日本でどんな動きがあるのか、あるいは、日本人たちが国連に対して、どうした、どういった期待、あるいは不満を持っているのか、それから、どういった人材、あるいはテクノロジー、面白い取組があって、国連の場に発表するのに値するののかというようなことを吸いあげて伝えるというのも、私たちの任務でして、例えば、今日の、この**SDGs**を通じて平和を考えるという取組についても、ニューヨークに伝えたいなと思っております。

そういった役割を担っているのが国連広報センターでして、ジェンダー・パリティに大変

意識が高い組織でして、今、私の事務所は、職員の7割が女性で、インターンも7割が女性のインターンというようなジェンダーに大変配慮した事務所になっております。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

ありがとうございます。では、最後に和田（和田徳之）様、お願いいたします。

○和田 徳之（next ひろしま実行委員会代表／株式会社和大地 代表取締役）

こんにちは。広島出身で、東京在住の和田と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。本業は自然の教育の PR、企画をやっておりまして、地球みたいな苔玉（こけだま）というのを作るキットを提供していまして、それを幼稚園とか無印さんとか、いろいろなところに売ったりします。今日は、それとは別にライフワークで活動している next ひろしまに関してで、お話をさせていただきたいなと思います。

next ひろしまというのは東京でやっているんですけども、県人会とはちょっと別の、広島出身の人を中心にした緩いコミュニティです。始めたのが 2010 年ですけど、そのきっかけになったのが、その当時メイド・イン・ジャパン・プロジェクトという仕事をしておりまして、日本の伝統工芸品とかを海外に販売するというのをしておりました。そういうときに JETRO（日本貿易振興機構）さんから、そういう相談を受けていたりしていたんですけども、日本という前に、自分の出身の広島のことを知らないなというのを、その時に思いまして。

大学から東京に出ましたので、当時 10 年ぐらい広島を離れていたんですよ。広島の流川の飲み屋さん、どこがおいしいかも、もちろん知りませんし、やっぱり、まず地元のことを知ってからこそ日本のことかなというのを思って、県人会に入る。東京の広島県人会に 3,000 人ぐらい会員さんがいて、そのなかで 1,000 人ぐらいが集まる結構大規模なものですけど、そこでいろんな方にお会いすると、面白い方多いですよ。そういう方と会っているうちに、いろんな話を聞きながら、広島の先輩方の素晴らしいところをもっと学びたいなと思ってつくったのが next ひろしまです。

でも、もともと、経歴にもあるのですが、エイベックス（エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社）というところで、音楽業界で働いていたというのもありまして、もうちょっと、やわらかいところから入りたいなというのもあって、楽しい場をつくったうえで、真面目なことを伝えるという、右脳から入って左脳に落とすというのをテーマにしていまして、というところで、毎月、広島出身の人が頑張っているお店が、東京にいっぱいあるんですけども、そこを飲み歩く会というのをやっております、drinks ひろしま。

今月で 84 回目を迎えて、基本は、大震災の月以外はやっております。そういうことをやっているなかで、広島同士でいろいろ話すと、特に、やっぱり広島出身で東京出てあるあるで、8月6日の違和感があるんです。感じている方いらっしゃるかもしれませんが、8月6日の広島の雰囲気、テレビ番組から、新聞からの雰囲気と、東京に出たの雰囲気はやっぱり違いますよね。

テレビ番組はもちろんですし、その日にイベントをするって、基本、考えられないんですけども、やっぱり、そうではないというのが当たり前なんだなというのを感じながら、改めて、広島のことをちょっと真面目に考えるということをやっていたりします。

わいわい、飲み会をしたりしながら、真面目に学ぶというような会をしまして、去年は、ちょうどカープの 25 年ぶりの優勝がありましたので、カープのユニフォームを着て銀座を真っ赤に染めるという企画をしまして、県の東京事務所の知事室をお借りいたしまして、そこで、ちょっと真面目な勉強会をして、そのときに末松さんにもご登壇いただきまして、あと、キリン（キリンビール株式会社）の執行役員の坪井純子さんにもご登壇いただきまして、普段、知っているようで知らない話、キリンが広島で会社でないんですけども、僕らは、広島出身の人は大概、結構、広島で会社だと思って育った節がありまして、それでなんですけれども。

あと、やっぱり常石さんのお話とか、特に広島市出身だと東のほうの話を、やっぱり知らなかったりするんで、非常に興味深い話を伺ったり、そういう機会がつかれるのも、やっぱりカープが盛りあがって、ユニフォームを着て、わいわいするという、誰でもがフラットにつながる場をまず作って、そこに、ちょっと真面目な話を入れると、みんな、ちょっとすんなり、そのあとに、今後の 25 年の広島をどうするかみたいなことを、真面目にちょっと語り合うような会をしたりとかしております。そんな感じで。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブ・スピーカー）

はい。ありがとうございます。非常に楽しそうな雰囲気が話のなかでも伝わってきたので、ぜひ SDGs も絡めて、楽しみながら飲み会をしていただければと。それでは、このメンバーで話をしていきたいと思っておりますけれども、一応、最初に打ち合わせで、私からこういうふうに進めましょうというような話をしておりますけれども、そのときにも登壇者の皆さまに、やっぱり、登壇者が盛りあがっていないとオーディエンスの方々も楽しくないんじゃないかなというようなところもありますので、もし、私の段取りがつまらないというふうに思ったら、すぐにほかの方々にはコメントをいただいて結構ですというふうに言ってお

りますので、段取り通り進まなくて、私が焦っていたら、もう、いろいろ盛りあがっているのだなというふうに感じていただければと思います。

皆さまに自己紹介をいただきましたけれども、今回、広島を世界に広げというような形で題名が書かれていますけれども、メンバーの方々は、半分が広島に住まわれていたりとか、縁を持たれている方で、半分がそうではないというような方で、私も今は石川県の金沢に住んでおりますけれども、もともとは東京でして、広島との関わりというと、私の義理の兄が広島カープの熱烈なファンでして、北海道に住んでいるんですけども、子どもが熱を出しても試合を見に行くというくらい、すごく熱烈なファンなので、やっぱり、広島だったりカープを愛している方というのは、ほかとは、全く違うほどの思いの強さを持っているのだなというのを肌で感じるというようなところでございます。

私は、もともと東京で、金沢に移ったんですけども、そのときにすごく意識をしていたのは、今からもテーマになりますけれども、日本特有の考え方、価値観というようなことです。私が所属している NGO、今、日本代表をしている NGO ですけども、世界 33 拠点ありまして、途上国、先進国、ごちゃまぜでリーダーが話し合っ、SDGs の達成をビジネスでどう解決するのかというような活動をしているんですけども、彼らと話をしても、やはり、自分は日本人特有だなと思う瞬間というのはあるのです。

というのも、人間の存在自体が自然の一部として息づいているということに、心底、子どものころから自然に思っているというようなこと、そして、人間には上も下もなく、皆さん平等なんだというような、ただ、機会に恵まれていないか、あるのかというような違いはあるけれども、それ以外は、皆さん、平等なんだというようなことを、本当に子どもの頃からずっと思い続けている、信じつづけているかどうか、このあたりというのは、日本人が他の国の方々よりも、強く持っている部分なんではないかなと思っています。

そういうようなこともあって、例えば、ほかの国であれば、首都においてはかなり活動が活発に動いていて、企業さんも非常に革新的な技術を持ったりとか、地球規模の取り組みをしているというようなところも、たくさんあると思うんですけども、日本は地方であっても素晴らしい技術を持っていたりとか、地域のことだけではなくて、地球規模のことを考えて活動をなさっているような企業さんだったり、団体さんというのが非常に多い。

そういったところというのが、まさに日本特有の強みであると思います。先ほど、末松さんも少しおっしゃられていましたけれども、そうはいつでも、皆さん、実は、コミュニケーション下手というところもありますので、やっているけれども、うまく発信されていないというようなこともたくさんあると思うんですね。なので、どちらかというと、今、私

たちが培ってきた価値観だったり、やってきた取組というのを、うまく世界に広げていく。それによって、世界というのは、やはり、だいぶ形が変わっていくのではないかな、そういうポテンシャルを持った国じゃないかなと思っております。

平和構築というものが、最終的な、当たり前になるということが大事ではあるんですけども、それを担うためには、日本人としてどういう価値観を伝えていかなきゃいけないのか、日本人がまさに培ってきた、どのような行動を世界に広げていかないといけないんじゃないか、こういったところに対して、登壇者の皆さまから、ご紹介をいただいきたいと思っております。

前置きが長くなりましたけれども、セッション6の構成としては、今のような考え方をベースに、後ろに PowerPoint が映っておりますけれども、3つのポイントに分けてお話を聞いていきたいと思っております。最初は、思いを抱きというようなところで、まさに日本、そして広島で私たちが育ってきたなかで大事にしてきたことは何なのかということで、教育面のアプローチから、日本の教育というのは、世界から見ると、こういうようなところが、やはり優位性があるんだとか、非常に貴重だと感じられているんじゃないかというようなことについて、お話をさせていただきます。

次に、実際に行動していくといったときに、そういった思いを基に地域を活性化させていく、これをみんなの力を結集していくためにはどうしたらいいのか、そして、そのとり組みが持続的に続いていく、こういうような仕組みを作っていくためにはどうしたらいいのか、というようなことについてお話をお伺いしていきたいと思えます。

そして、そういったものに対して、これまで培ってきた平和への思い、やってきた活動について、世界に広げていくためにはどうしたらいいのか、ということで、東京で集い発信していく、もしくは、国際機関と連携して世界に発信をしていく、こういった活動についてお話を聞いていきたいと思っております。では、まず、最初に、人間形成、人材育成というような観点を湯野川様から活動を含めてお話をさせていただきたいと思しますので、どうぞ、よろしく願いいたします。

○湯野川 孝彦（株式会社すららネット 代表取締役社長）

はい。平本さんから、日本というのはちょっと世界に通用する普遍的な、何かサムシングを持っているというようなお話があったんですけど、うちは教育分野ですが、まさにそういうものが日本にはあって、教育分野にも多いなということで、ちょっと、そういうお話をさせていただこうと思えます。

私のスライドを、はい。海外の活動につきましては、2014年から JICA さんのプロジェクトで始めまして、それは終了して、今はわれわれの事業として行われています。先ほど言いましたが、海外における貧困層向け、スラム地域のど真ん中に、ちっちゃな、寺子屋のようなものをつくって、そこにはパソコンが置いてあって、小学生たちがやってきて算数を学ぶというようなことをやっております。これは、マイクロファイナンスです。バングラデシュのグラミン銀行というのは有名ですけど、これはスリランカでやっています。

スリランカには、女性銀行、ウィメンズバンクというのがありまして、主にそこと組んで、こういうを作っているということです。実は、日本の教育というのは、アジア各地でやっていますと結構いけています。日本では、やっぱり、いろんな批判もありますけど、今日は学生さんもいらっしゃいますけど、結構、日本の教科書とか、海外と比べてみますと、本当によく、最近はビジュアルで、わかりやすく、よくできていますね。というようなこともありますし、あと申しあげますが、非常に細かく教えるようなことができます。

次のページ。実際の e ラーニング。こんな感じの e ラーニングで、全く読めませんね。これはスリランカのシンハラ語というんですけど、シンハラ語版の算数のプログラムを作っていて、忍者キャラクターが教えるというわけです。こういうのをすごく細かく教える。例えば、1~5の数を、初めて数える子、学校で学んだことがない子でもわかるように作っているんですね。1から数え方まで教えるんですけど、例えば、1~5までをちゃんと教えます。次に合成と分解といって、例えば、5というのは、1と4と、それから2と3に分解できますよね。それを徹底的に瞬時に頭のなかで出るようにする。

それをちゃんとやっておくと、あとで繰り上がりの計算、例えば、8足す5とやったときに、5を2と3に分解して10の束をつくって13というのが一瞬でできるようになる、みたいなことを、細かくプロセスを分解して教えているのは、やっぱり日本ぐらいです。向こうはそういうプロセスをすっ飛ばすので、できる子はできるけど、できない子はできない。徹頭徹尾できない、みたいなことが起きたりして、われわれもやっぴいながら、こういうのは、実は日本的なんだなということに気づいたりするわけですけど、そういう日本流のきめ細やかな部分というのが、非常にあつたりするんですね。

前のページに戻っていただければ。この塾は、スラム地域のど真ん中でやるわけですけど、この女性、先生役、われわれはファシリテーターと呼んでいますが、この女性たちも、実は専門教員ではありません。地元の素人さん、スラム地域の素人さんの女性をわれわれが4日間、訓練をして、そしてやってもらったということです。そういう意味では、われわれの教育分野の SDGs でいうと、4番の教育ということですが、実は5番のジェンダー、平等、貧困地域でありますから1番の貧困問題というのを、全く補助金とか寄付とかを使

わずに、彼らが払えるような月謝をとって、そのなかで運営しているということなので、非常に持続可能な形で運営ができているということなんですね。

ここでは日本的なものに戻しますが、実は単に算数を学ぶというだけじゃなくて、日本のしつけも教えています。入ったらあいさつをする、入る前に、最初は手洗いをする。先ほども保健衛生という話もありましたが、途上国では、やっぱり、ちゃんと手を洗ったりするのも、ずいぶん重要なことですが、ちゃんと手を洗う、入ったらあいさつをする、後片づけをするという、日本では、やっぱり、当たり前のように塾で行われているようなことをきちんとやる。

向こうは、甘やかし文化がありますので、そういうことは全然やらない。そういうことをやるのも、すごく受けたりして、保護者会をやったりすると、お母さんがうちの子は、今、家でも行儀がよくなりましたというかたちで喜んだりするような、そういう面があります。なので、われわれが自然とやっているような、実は、教育分野だけに限らないかもしれませんが、当たり前のようにやっている日本のことが、実は、海外では非常に受け入れられたりとか、喜ばれたりするような、そんなことがあり得るのではないかなと思います。

すみません。もう一回、次のページに。これは、忍者キャラクターにしているわけですが、説明会の時とかに、子どもたちに、みんなは忍者を知っている？って言うと、スリランカでもインドでもインドネシアも、全員が知っているって手を挙げますね。これも日本の文化力というのはすごいなというふうに、インドとスリランカは、だいたい、『忍者ハットリくん』を見て育っています。

インドネシアは現在進行形で『NARUTO-ナルト-』を放映しています。吹き替え版。ということで、そういう日本っていうと、例えば、そういうアニメ、それから科学技術がものすごく進んでいる、人は温和で親切、丁寧、礼儀正しいというような、そういう全体的なイメージがあって、われわれは、それに乗っかってきているといえますか、やってみると、その辺の特徴に非常に受けるということについて、いろんな国の人たちが好意的に接してくれています。

インドネシアなんかは、イスラムの国ですけど、ここも先生方がいるので、日本語であいさつしようというので、普通に起立、礼、着席と日本語でやっているわけですね。そのあとにイスラムのあいさつを続いてするというような感じで、日本とイスラムの国が融合したような感じで仲良く、みたいなことをやっています。

はい、次のページ。そんな感じでやっていますけども、言いましたように、SDGs の 1、

4, 5について、外部からのお金だとか、他からの寄付とか補助金を使わずに持続可能な形でできるような、これもクラウド型のビジネスなので、われわれは、eラーニングなので、そういう意味では、生徒が1人増えることにおける変動原価というのは、極めてゼロに近いということなので、普通の日本から出ている、多くの教育企業なんかは、やっぱり富裕層向けの高い月謝をとらないと、それは持続可能な形にならないから、やっぱり、お金持ち対象になります。

だけど、クラウド型ですと、変動原価がゼロに近いので、その人たちが払える金額に合わせても損はしない、損はしないということは持続可能な形で続けられるというような、そういうビジネスモデルでやったのです。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

ありがとうございます。まさに最初におっしゃっていただいたように、できる子はできるけど、できない子はできないっていう、そういった、ある意味、格差を生み出すような、そういうようなやり方ではなくて、やっぱり、等しく、教育を受ける子どもたちが伸びしろを伸ばしていくというようなところが、うまく反映されている事例なのかなと。

○湯野川 孝彦（株式会社すららネット 代表取締役社長）

言い忘れましたが、教育面で見ると **PISA** という国際学力テストがありまして、日本は上位で、日本より上は、香港とかシンガポールとか、都市に近いところだけで日本は結構上のほうで、日本の **PISA** の学力分布を分析してみると、やっぱり、底辺が分厚いんですね。すごい優秀な子たちがめちゃくちゃ多いというよりは、一般層が全体的にできるという、そういう意味では日本の底あげ力というのが、教育分野に非常にあって、底あげというのも輸出産業といえるのかなと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

なるほど、なるほど、ありがとうございます。では、まさに海外でも活躍なさっている湯野川さんの活動でございますけれども、ここで、根本様から国連の立場で今のお話をどう感じられたのかというところをですね。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

はい。まさに「誰も置き去りにしない」を教育事業でやっておられるわけですね。それが素晴らしいなと思いました。そして、ゴール1, 4, 5を挙げていらっしゃいましたけれども、まだまだ、続くわけですね。女子教育そのものが人権、格差の是正ということで

10につながる、それから、教育を受けた女の子がお母さんになったときには、子どもをより健やかに育てられるということでゴール3、それから、栄養のある食事を提供できるゴール2、和平交渉などにも自信を持って参加できるということで16というように、本当に教育というのは万能薬、マララさんが、今朝、紹介したように教育は希望であり、そして平和だというふうに言いましたけれども、まさに礎だなと。

ぜひお願いしたいのが、SDGsも教えてあげてください。SDGsは世界の共通言語で、この子たちが後に大人になって生き抜いていくときにも、いろいろと役立つと思いますし、日本でも初等教育、それから中学校の教育で、2020年度、2021年度の学習指導要領の改訂で入ってきますので、ぜひ、スリランカ、ほかの国々でもお願いしたいと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロデューサー）

ありがとうございます。まさにSDGsを、うまくコンテンツとして盛り込んでほしいというのは、私も、実はちゃんと提案書を持っていかないといけないんですけども、リクエストしているところでして、もし、すららネット様のなかで、そういった特徴がうまく盛り込まれていくようになればと思いますし、それが実現したときには、平本、ちゃんと提案したんだなというふうに思っただければと思います。ありがとうございます。

では、次に、そういった、まさに、先ほどおっしゃられていただいたような、誰も置き去りにしないというような価値感がすごく根づいている日本から、では、まさに行動をしていくといったときに、みんなの力を集めて大きな力に変えていくといったときに、ITの力は非常に大きいと思うんですね。そういった観点で、関様からお話をいただきたいと思います。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

はい、ありがとうございます。私のほうのスライド、私はこれ1枚だけですけれども、ちなみにコード・フォー・ジャパンのコードというのは、コーディングのコードです。なので、テクノロジー活用に結構寄っている、IT活用によっている活動ですけれども、「ともに考え、ともにつくる」というキーワードで活動しています。

それはどういうことかという、私もそうだったんですけど、あまり親身という言葉になじみがないというか、公共サービスというのは税金を払っているから提供されているもので、別に自分たちが何か手を動かすみたいな意識が全然なかったんですけども、それだと、今後、駄目だよねという漠然とした感覚が、東日本大震災で、結構、みんな、やっぱり声をあげないと、何もしないままだと日本ってやばいんじゃない、みたいな空気が出て

きたときに、共に考えるし、共につくる、文句を言うんじゃないなくて、一緒に手を動かす人が増えていく必要があるという根本の思いが込められている、そのなかで、それにテクノロジーを活用するのが、今の時代はいいんじゃないかということで活動していて、今、皆さん、地図で見られていると思うんですけど、今、全国で 44 のコード・フォーが活動しています。

実は、ここだけではなくて、最近立ちあげましたとか、準備中ですよとか、そういうところも含めると 80 ぐらい活動しているということなんですね。ここ、地図があがっているのは、ある程度、活動してきていて、こういうロゴもあって、ここだったら、ちゃんとコード・フォー・ジャパンとして、もう安心して紹介できるねというような組織が、今 40 あるというかたちです。ロゴが、まず違いますよね。

ここに、表れるんです。全ての組織はコード・フォー・ジャパンの傘の下にあるわけではなくて、本当に緩い、いくつかのルール、一企業の利益のためだけではないとか、オープンな活動であるとか、そういうルールがあって、しかも、ある程度、やってきているという組織なわけです。

それぞれ任意団体だったり、医療法人化していたりとか、一般社団法人だったりとか、それぞれ独立した組織として活動しています。ここはテクノロジー活用というところと、すごくオープンさという、自由さっていうのが、重要かなと考えていまして、そもそも、こういう組織運営というのは、私が、オープンソースのコミュニティーのあり方からヒントにして活動しています。コード・フォー・アメリカという組織もあるんですけど、そこも、かなりオープンソースの文化からやってきている活動になっています。

何がオープンソース的かという、そもそも、オープンソースソフトウェアというのは、一企業だけが作ったソフトウェアではなくて、ある人が作ったものを、ソースコードというのを公開して、それは誰でも使っていいですよ、その使ったものは、改善したら戻してくださいっていう、そういう文化です。誰かが、なにかをつくりましたと。最初は小さなものでも、それ、いいねと、じゃあ、うちでも使うよと使って、なんの断りもなく使いますね。

バグがあったので直しておきました、みたいなのを戻す、機能追加しましたみたいなのを戻す、とやっていくと公開したものが、どんどん良くなっていく、いつの間にか良いものになっていくという、そういうもので、皆さんが日ごろ使っているスマートフォンでも、いろいろな部分にオープンソース化された技術が入っています。

なので、急速に技術が発展したわけですがけれども、このコード・フォー・ジャパンのコミュニティも、そこらへんを意識していきまして、まず誰でもコード・フォーを始められます。

ただし、ある程度、例えば、反社会性チェックとか、一応したうえで、この地図に載せるにはハードルがあるんですけど、始めるのは自由です。われわれはワークショップとか、やり方を全部オープンにしているんですね。各地で好きなようにワークショップをやってくださいと。その代わりに、いいものができたら公開してね、みたいな方式になっています。

なので、自立的に広がっているのです。各地域の活動を、僕は全部把握しきれていないぐらい、いろいろ活動しています。それぞれの組織のなかでも、誰でも入ってきていいですよと、好きなことをやっていいですよと、それをみんなで応援しましょうというような形のワークショップ、定例会みたいなものがあるって、日々、この人が面白いことをしているので定例会に来て発表してください、みたいな、それで、みんなに何ができるか考えてみましょうとか、そういった形の緩い定例会みたいなのが各地で行われているという形になっています。

今日のテーマである、どう行動に移していくかというところで、すごくポイントだなと思っているのは、そのように緩くつながることによって、1つの概念、このコード・フォーという概念って、すごく便利で、各地の活動は全然、違うことをやっているんですね。

ある地域は行政と一緒にアイデアソンというワークショップをやって、新しいアイデアを考えてみたり、ある地域ではマッピングパーティーという地図づくり、デジタル地図をつくって、街歩きをして得た情報を地図に落とすみたいなことをやっていたり、ある地域ではソフトウェアをつくったりということをやっている。

そういった各地で好きなことをやっているんだけど、コード・フォーという固まりで、一緒の場にいる、知恵も共有されていく、その概念が共有されていく、これは、今日、ずっと一日聞いていて、SDGs も一緒だなと。ゴールがあつて、やり方は自由で、でも、いろいろな、こういう場でみんなが知恵を共有する。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

ロゴとアイコンもガイドラインに則れば、自由に使ってもらえるんですね。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

ああ。素晴らしい。オープンソース的ですよ。なので、そういうところ。あとは、キー

ワード化というのがあると、コード・フォーもそうですけれども、自立的に、それ、いいなと思う人が増えてきて、活動に参加していくというような、そういったあり方があるのかなと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／
Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
ちなみに、広島にもコード・フォー。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）
コード・フォー・ヒロシマもあります。2年、3年前ぐらいから活動していて、ありますね。もっと大きくしておけばよかったですね。すみません。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／
Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
いえいえ、なるほど。で、あれば会場にいらっしゃる皆さまも、そういった活動に参加したいと思えば。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）
そうですね、はい。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／
Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
すぐできると。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）
コード・フォー・ジャパンは、今、ハチドリ舎という新しい拠点をクラウドファンディングでつくって、そこで定例会をやったりしているみたいですね。なので、ぜひ遊びに来ていただければ。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／
Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
対象年齢は。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）
特にないです。ただ、活動で多いのは30代前半、20代後半から30代前半の男性が多くて、ちょっと全体はわかりませんが。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
わかりました。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

地域によっては、女性のほうがすごく多い、子育てに関して活動しているとか、そういうところもありますね。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
ありがとうございます。ちょっと時間が、まだ迫っていないですけども、想定よりも長引いてきているので、本当はクロスでやっていこうと思ったんですけども、皆さまにお話をお伺いしていくという進め方にしていきたいので。では、次に末松さん、お願いできますでしょうか。

○末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

はい。どのようなお話がいいのかと悩んだんですけども、国内の話と海外の話と1つずつ簡単にお話をしたいなと思います。われわれは中核事業が造船所なんですね。造船所って、つくるのが大変なんです。つくるというのは、インフラの投資が、まず大きいですよ。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）
なるほど。

○末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

それだけではなくて、匠（たくみ）がいるかどうかは別として、匠の技といわれていて、船をつくるための技術移転、教育がすごく難しいといわれているんですね。それを、われわれは、1994年にフィリピンのセブ島に造船所をつくるというプロジェクトを始めたんです。

このプロジェクトを始めたときには、私たちがつくっている船というのは、だいたい3万トン以上の船ですけども、23年前のフィリピンは1,000トン以下の船しかつくっていないので、それこそ、砂浜の上でつくれる船だったものが、ドックが必要ということで、大変大きなチャレンジだったんですね。

無謀といわれる感じで、そもそもインフラもない、ドックもつくらなきゃいけない、さらに人も育てなきゃいけないという三重苦のなかで、なんで出るのかというと、1つは円高、競争力が、日本の造船全体になくなっていったというのと、もう一つは、少子化で間違いなく日本で船づくりに関わってくれる人の人数が減るといのはわかっていたというのがあったので、そういうジャッジをしたんですね。

出るときに、やっぱり、頭でっかちだから、英語のできる人はいませんよ、「アップダウン、レフト、ライトでできるんだ、船は」ということで本当にそのまま広島の前田舎で育った人たちが船をつくる技術を持って、セブに行きました。やっぱり、振り返ってみると、造船という業種が特殊で幸せだったなと思います。やはり、簡単に技術を教えることができ、例えば3日、4日で教えることができれば、より安い労働力を求めて他の地域に移ったりしますよね。

だけど、船づくりというのは、インフラも大きいし、その後、人を育てるのに時間がかかるしということで、われわれは出ていく、バランバンという、すごく田舎の町で、セブのシティーから、当時4時間以上車に揺られて行く場所だったんですけども、その町長さんに100年ここで事業をやるからと約束して出て行ったんですね。今でも、実際に常石造船って、広島県の福山市で100年を迎えているわけですけども、100年のものづくりになりますよという、そういう、ものづくり独特の考え方だったんだなと思います。

思いがけない結果、良い事としては、フィリピンって、いろいろな人、船乗りさんが多かったり、あるいは家政婦さんでアジアに出ていたりとかということで、人が流出する国で家族と一緒に暮らすことが少ないのです。ところが造船というのは、男の人が手に職をつけることができ、女性も結構、仕事があったりするんで、家族と一緒に暮らせる仕事ということで、私たちもふたを開けてみて、気がついたのは、日本だと当たり前だけれども、そうじゃないことって多いですよ。

やはり、安い労働力を求めると、どうしても女性は簡単にできる仕事を、途上国に持っていくというふうなケースも多いと思うんですけども、そういう部分でいくと、しっかりと技術移転をしながらやっていくということで、今、22~23年と取り組んでいます。去年もお話ししたと思うんですけど、その結果、フィリピンは、今、中国、韓国、日本に次ぐ、第4の造船大国に育っているんです。20年で景色は変わるんだなというふうに、私は、やっぱり、すごく大きく思いました。

もう一つの国内の事例ですけども、東日本大震災のあとに、いろいろな形で寄付をした

り、いろいろな復興支援の関わり方があったと思うんですけど、常石グループとして何をやったかという、小さい会社なのでお金で何かできるわけがないということで、実は、岩手県の山田町に小さな造船所をつくったんです。考え方としては、手に職を持ってほしい、そして、働き続けることができるという環境をつくりたいということで、造船所をつくることになりました。

何万トンクラスの造船所ではなくて、アルミ船をつくる、グループのなかにある会社がそれを引き受けまして、そこで、今 20 人弱ですけれども、造船マンを育てて、最初、立ちあげのときは、最初のメンバーはみんな、広島県まで来て、船のつくり方の研修を受けて、それから戻って、現地で船をつくっているんですね。ただ、なかなか、船の受注がなくて、今の主力製品は津波シェルターをつくっています。ぜひ、機会がありましたら、ぜひ、その津波シェルターも見てほしいなと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 **SDGs** ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

はい、ありがとうございます。非常に貴重なお話をいただくとともに、そんな前から、そういった取組をされているといったところに、すごく驚いたんですけれども、まさにご発言のなかに 100 年続けるからというふうにおっしゃられた、これがまさに日本企業の、すごい強みだと思うんですね。

海外のグローバルビジネスの話をしていると、多くの場合、日本企業というのは意思決定が遅いと批判されることが多いんですね。例えば、私はアフリカビジネスとかも担当しているんですけれども、アフリカにも、あまり、みんなが、例えば、欧米がどんどん進出しているときにも、日本の企業は様子を見ながらどうしようかなと考えている。ただ、それはいい反面もあって、日本企業はやると決めたら、ずっと根づいてやり続けるという覚悟で進んでいくと。

だからこそ意思決定というのが、すごく慎重に考えているというようなところが、特徴としてあると思うのです。なので、意思決定を早くしろというようなことよりも、やっぱり、一緒に、その地域をつくっていくのだ、国をつくっていくのだというような思いを持って企業としてとり組まれていくというような日本企業の良さを生かしていくということは、すごく大事なんじゃないかなというふうに。

○末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

本当におっしゃるとおりですね。例えばワーヤーハーネスで有名な矢崎総業（矢崎総業株式会社）さんも出ていくときは思い切り出ていきますけれど、引くときってすごいんで

すよね。このあいだも、ある国の工場を閉鎖する、引くときにこそ、育英会の基金をつかって、この地域とのご縁を途絶さないようにという引き方をするんです。これが日本企業だなど、私はちょっと感銘を受けました。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

おっしゃるとおりですね。まさに企業活動にも、そういった日本人の精神というものが、きちんと息づいているというようなどころをお話いただいたのかなというふうに思います。では、次に、伝えていくというようなところで、この順番で、和田様からお話をさせていただきたいと思いますけれども、ご紹介のなかで、東京で集っていろいろと活動をされているというようなことがありましたので、東京で活動しながら広島の良い良さであったり、日本の良さというものを世界に発信していく、こういうような観点でお考えをお話いただければと。

○和田 徳之（next ひろしま実行委員会代表／株式会社和大地 代表取締役）

はい。そうですね。まず、遠く、集い、発信して行くの前に、まず、やっぱり集って、まず内省するというか、僕らが普段、目先の日々の暮らしだったりとか、そういったところに集中しがちだったりすると思うんですけれども、今だったら、やっぱりカープの試合に一喜一憂するんですけれども、そのなかに、でも眠っている大切なものとか、子どものころに学んだこととか、そういうことが、広島出身だと平和学習があったりするんですけれども、そういったところを、ちょっと思い出すようなきっかけがまずつくるといいなと思っています。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

なるほどね。

○和田 徳之（next ひろしま実行委員会代表／株式会社和大地 代表取締役）

はい。先日も、先輩方の経験を学ぶという、「広島ナビーク」というなかで、高校の先輩でTBSの監督の土井（土井裕泰）さんという方がいて、昔だと『愛していると言ってくれ』とか『ビューティフルライフ』の監督さんで、最近だと「逃げ恥」（『逃げるは恥だが役に立つ』）の監督をして『カルテット』というドラマのプロデュースもされているんですけれども、その方と話をしている、正直、広島のこととか考えていなかったけれども、最近、ある程度、年齢も達してきて、自分の余力もできたときに、なんか恩返しじゃないけども、なにかしたいという衝動に駆られていて、広島なのか戦争なのか、わからないですけども、そういう作品を絶対つくりたい、みたいな話も、最初にインタビューしたときはおっしゃ

っていなかったんですけども、場になって、みんなで盛り上げてとなると、やっぱり、そういう気持ちが芽生えてきて、そういう場が登壇者の方だけではなくて、参加者にも出てくると思うんですけども、そういう場をつくっていくのが、すごくいいんじゃないかなと。

あと、他にも、戦後 70 周年のときに真面目な会をしたときに、被爆者の方に来ていただいてお話をいただいたりとかしたんですけども、もう一つしたのは、当時、江田島の海軍兵学校にいらっしゃった方にインタビューをしたんですよ。ヒライタダマサさんという方で、その方はおじさんが山本権兵衛さんという海軍大臣の方で、いろいろお話を伺っていて、最後に僕らにメッセージを言われたときに、今日の、日本人としての価値観に繋がるか、ちょっとわからないですけども、言われたメッセージが響いたんですけど、それが劣等感を持つな、優越感を持つなという話をされて、欧米に対して、劣等感を持つてもいかんし、アジアに対して優越感を持つこともない、そのためには努力しろと言われて、取りあえず眼前に最善を尽くせと言われてたんですけど、そういうのがすごく大切な気はしております。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

なるほど。よく、最近、そういった内省に関しては、海外でもマインドフルネスとか、そういうような概念の浸透によって、いろいろな機会内で内省する機会を設けて、いろいろな方々が、そういうようなやり方というのを学んでいるところですけども、私が、例えば、海外の先生方に、そういったマインドフルネスの話とかを聞くと、皆さん、やっぱり、ゴールセッティングがすごく大事だということをおっしゃるんですね。ゴールが決まって、それを達成するために、どうマインドフルネスにしていくのかという考え方が、やっぱり欧米の考え方の主軸ですね。

どちらかというと、今のお話の、まさに劣等感を持つな、優越感を持つなというのは、それ以前のプロセスのなかで大事にしていくものというような考え方だと思うんですね。なので、少し、日本人としては、ポリシーだったり、人間として大事にしていく価値観、これを見つめ直すことによって気持ちが安らいだりとか、なにか新しい取組をやろうというような気持ちになる、こういうようなところというのが特性としてあるんじゃないかなと。

なので、先ほど、発信の前に、まず内省ということが大事だとおっしゃっていたことも、非常に、日本人として大事なところが含まれているんじゃないかなというのを、お伺いして、思います。ありがとうございます。では、最後に根本さんから。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

はい。皆さんのお話を伺っていて、すごく感じるのは、それぞれの方々が、強い思いを持っておられて、ひるむことなく、まず行動に移してみる。そして、それを継続する力というものを持っておられる。その結果、今日、ご発表いただいたような結果、成果というものが生まれるんだなということを強く感じました。

国連に勤めていて、広島という土地が持つ、大変強い力を感じざるを得ないんですけども、一昨年、2015年、広島県と広島市のご協力を得まして、国連軍縮会議という、世界の軍縮の専門家が集まって議論をするという国連の会議を広島で開かせていただいたんですけども、そのときに核軍縮をやっている、まだ1回も広島を訪問したことがなくて、初めて被爆者の方々の話を直接聞いて、平和記念資料館でさまざまな展示を見てという人たちがいて、その人たちは、まさに、魂を揺さぶられるような、そんな体験をしていたなと、それをつぶさに目の当たりにしました。

国連のなかでも広島を訪問したいという人は大変多い。国連のピースメッセンジャーの1人であるマイケル・ダグラスさんは、ぜひ一度、自分が信念を持って関わっている核軍縮と大変密接な関係のある広島を訪問したいというふうに言ってくれています。今、ご覧いただいているのは、8月6日に国連本部のウェブサイト、UN ニュースセンターに掲載された記事ですけども、このように世界中に発信されている。この力、場の力というものをいろいろな意味で活用していただきたいと思うんですね。

1つ、ご提案したいのはSDGsというのは、地方が国を介さなくても世界の課題につながっていけるプラットフォームです。例えばですけども、平和という側面を大切にするような、広島県としてのSDGs基本計画みたいなものですか、そういったものをマルチステークホルダーで議論されて県民が自分のものだと思えるような形で作ったりとか、そんなことをぜひご計画いただきたいなと思います。

今日の会議、先ほどニューヨークの国連本部に伝えたいと申しあげましたけれども、これも先ほど来、出ている、持続可能な形で続けていくということで、いろいろな大きな結果というものが将来的に生まれるものだと思いますので、ぜひ、なんらかの方法で続けていただければなというふうに思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

ありがとうございます。うまくまとめていただきましたけれども、もうちょっとだけ時間があるので、私の方から、今、まさに根本様から、最後にいただいたメッセージ、これを、

この取り組みを続けていくというような形に関して、もう少し話を伺っていきたいと思うんですけども、やはり、まさに、こういった形で、毎年同じ場所に、みんなが集まって平和、そしてSDGsについて考える、これはすごく大事なことだと思うんですね。

一方で、やはり、何か活動が育っていく、そういった場にもしていく必要があるんじゃないかなというふうに思いまして、例えば、今、皆さんはオーディエンスとして参加いただいていますけれども、5年後にはこちら側で活動の成果というのを共有いただいているであったりとか、そういうふうな形でどんどん繋がっていくと、もっと発信力もそうですし、考えていくテーマというのでも深掘りしていけるんじゃないかなと思うんです。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

そうですね。それから発表の場というのもここだけではなくて、それが、また国連本部であったり、ジュネーブ本部であったり、ウィーン本部であったり、あるいは、国が広島県に押されて、こんなような会議というのがロールアウトするとか、オープンな形でいろいろと繋がっていけると思うんですよね。

今日はテクノロジーのセッションもありましたけれども、例えば、ビッグデータの中から、何があると平和への対話というものを生むきっかけになるのかとか、そういったことを分析していただくとか、それぞれの専門家の知見というものを動員して、多角展開できると思うんですよね。

それからソフトパワーというところでいうと、先ほど、「楽しくないと」という話がありましたけれども、やっぱり楽しい要素ってすごく必要で、先ほど、湯野川さんのお話のなかではアニメの話とかもありましたけれども、日本が誇るソフトパワーで平和を語っているものもあります。例えば、アニメの『この世界の片隅に』、広島が舞台ですけども、大勢の人たちに感動を届けているものだと思います。こういったものを特別な上映会という形で上映して、平和のメッセージを広島として伝えていくということもできるのかなと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー)

なるほど。ありがとうございます。では、本当に最後に、皆さんに一言ずつではごさいませけれども、ぜひ、オーディエンスの方々が、今後活動をしていく上で、こんな取組だったら、皆さま、参加できますよとか、そういった第一歩を促せるような、そういうような取組であったりとか、なにか、アイデア、メッセージであったりとか、そういったものをいただければと思いますけれども、湯野川さんから。

○湯野川 孝彦（株式会社すららネット 代表取締役社長）

根本さんから教育は万能薬だという話がありまして、実際そうで、今、3カ国の子どもたちが、日本を含めると4カ国ですが、1つのプラットフォームに乗って、そこに本当にSDGsのコンテンツさえあれば、そういう子どもたちにちょろっと学んでもらうことができるんですね。

あるいは、今、慶応大学と、教育経済学の先生と話していますが、食育とかファイナンスに関する教育コンテンツをつくれれば、そのままコストをかけずに流すだけでできるので、そういう意味では、ここにいらっしゃる皆さん方が、例えばうちの、そういう仕組みを使って、こういうコンテンツの世界に発信したい、流したいとか、あるいは広島県として平和のメッセージとか、いろいろあるかもしれませんが、そういうことがあれば、また、ぜひ、お声がけいただいて、懇親会でもいろいろディスカッションができればと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

なるほど。ありがとうございます。関さん、お願いします。

○関 治之（一般社団法人コード・フォー・ジャパン 代表理事）

はい。まず、私自身がやりたいと思ったのは、コード・フォー・ジャパンと各地のコード・フォー・ファミリーの活動がSDGsで考えたらどういうふうに当てはまるのかとか、さらに、広げていくにはどうしたらいいか、みたいな、そういうリンケージを考えたいと思います。

あと、皆さまにこの活動に参加いただく、そのスモールステップとしては、9月23日、24日にCode for Japan Summit というものを、神戸のしあわせの村という所でやりますので、そこに各地のコード・フォー・コミュニティーが来て、成果を発表したりとか、こういうアプリを作ったよとか、こういうアクションをやったよとか、こういう企業と一緒にやっていますとか、そういった、いろいろなケーススタディーが学べますので、もし、良かったらお越しいただければと。Code for Japan Summit で検索したら出てくると思いますので、よろしく願いいたします。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

Code for Japan Summit ですね、ありがとうございます。末松さん、はい、お願いします。

○末松 弥奈子（ツネイシホールディングス株式会社 専務取締役）

昨年のこの会議で、私はコメントさせていただいたんですけれども、日本人の持つ、良い考え方に陰徳ということがあって、今日、私がお話したようなことを、外でしゃべっていると、だいたい、会社に戻るとおこがましいとか、よく恥ずかし気もなく、そんなこと言うねってられるんですけれども、さっきの平本さんがおっしゃっていたように、例えば、意思決定が遅い、それはしっかり考えて、しっかり取り組むからだとか、例えば、日本の企業がそういった所に行くと、おこがましいとか、陰徳といったような日本的な文化をもっと海外の方々に知ってもらいたいなという思いがあります。

日本の、今、そして、未来を正しく伝えていくという仕事があるんじゃないかなと、今日、ここに集まっている方々のなかには。私も、おこがましいんですけれども、お話をさせていただいていますが、そんなことだったら、うちの会社もやっているよとか、我々もやっているよということを、勇気を持って、みんなで言い合えるような場作りをしていきたいと思っています。以上です。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

ありがとうございます。根本様。

○根本 かおる（国連広報センター 所長）

今日はいろいろな気づきがあって、皆さんもお一人、お一人、こういうことができるな、こんなアクションができるなということをお感じになったと思います。ぜひ、その気持ちを継続して持ってほしい。アクションを継続して行ってほしいと思うんですね。やっぱり、一過性のものにしないほしい。

国連広報センターでは、一国連の広報センターではありませんけれども、私たちが中心になって、グローバルな学生フォトコンテスト、SDGs 学生フォトコンテストというものを手がけていて、一昨日、締め切りだったんですけれども、70 カ国から 1,000 の作品が集まりました。始めたときは、みんな疑心暗鬼でした。できるかな、でも、できたんです、という訳で、しつこく SDGs のゴールイヤーの 2030 年まで続けていこうと思いますので、ぜひ、皆さんにも継続していただきたいと思います。

○平本 督太郎（金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼 SDGs ビジネスエグゼクティブプロフェッサー）

ありがとうございます。最後に和田さん、お願いします。

○和田 徳之 (next ひろしま実行委員会代表／株式会社和大地 代表取締役)

今日、お話をいろいろ伺って、改めてSDGsと広島というところの可能性を感じたんですね。広島県人会が、世界中にある各県のなかで一番多かったりもするので、そういうところも含めて、先程、関さんからもお話がありましたけど、県民という意識よりも広島性というか、もうちょっと広い、今日、登壇された方の中でも奥さんが広島とかいう方もいらっしゃると思います。そういう方も含めて、広島として取り込んで発信していくみたいなのが面白いんじゃないかなと思います。

○平本 督太郎 (金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科講師／

Bop Global Network Japan 代表理事兼SDGsビジネスエグゼクティブスピーカー)

ありがとうございます。皆さまから、今後の活動に関するメッセージをいただいたかと思えます。こういった活動を、明日から始めようとか、それでは遅いということを私の師匠、ミズノさんから言われていまして、今日から始めなきゃ意味がないというようなことですので、せっかくワークショップがあつて、そのあとレセプションがあるということですので、ぜひ、登壇者の方々と何かご一緒したいとか、こういう提案をさせてほしいとかいうことがあれば、積極的にお声がけをいただければなと考えております。では、少し延びてしまいましたけれども、セッション6、これにて閉会とさせていただきますと思います。ありがとうございました。

○司会者

ありがとうございました。これで、セッション6を終了させていただきます。あらためて、大きな拍手をお願いいたします。

(了)